

明治二十九年一月

一體七ツあるのだけれど、これを七則とやれば堅く、七不思議と行くと古く、七變化と出かけると些と行き過ぎる。ナ、何とでもして置くか。

一 姉さん箱

これは坂下から左へ曲つて、右へ折れようとする角家の芋屋と軒ならびの煙草屋なり。お姿さん一人で店をして居る。近邊の書生一匁二錢を買ひに行き、「婆様おくれ。」といふと彼の婆公不服な體で、「人を、婆さんなんて呼んぢやあ嫌ですよ。」書生何の氣なしに、「ぢやあ御隠居様とやるかね。」「不可ませんよ、貴下は！」と秋波斜に動く處だけれど、お年のせんで顔の皺が横にゆれるから、「ぢやあ何といつたら可いんだえ。」婆公傲然として、「知れ切つたこつてさあね、ちよいと姉さんとおつしやいよ。」と肩を揺つてあまえるので、書生も大きにお察し申し、「む、それでは姉様。」「唯、旦那。」と婆さんは大喜び。パイレートの空箱を一つくれて、「しめると不可ませんから解くしてこれへ入れてお置きなさい。」と、すなはち條件を附して曰く、「あげますことはあげますがね、うつかり婆さんとおつしやると、直ぐに取上げてしまひますよ。」書生は夏もお小袖と、畏つて貰つて歸る。こゝに於てか、姉様箱の名あり。この事いひ侍へ語りつぎて、煙草はのまぬ小鬼までが推懸け行き、「姉さんおくんな。」といつちやあ空箱を貰つて來るので有合はしたゞけで

は間に合はず、近頃は本所から頻りに空箱を仕込んで来るなり。人あり試みに行って見よ、「婆さん」といへば煙草を賣るが、「姉さんおくんないさい。」とやると「また箱ですか。」と無銭くれる。

## 二 唾の買物

坂の上の學校に唾と聾と盲目とありとかう書出しても三人不具の狂言にはあひならず。近來は物價騰貴して二割高なりといふに、不具も妙な處に徳のあるもの。「なに／＼をおくんないさい。」  
「はい。」と出すと、ついと取つて、拂ふお錢はもとの値價、二オンス入の舶來煙草などは九錢が十八錢といふ恐るべき暴騰なるに、隊長品物を受取りて、九錢とはらひ悠然として行つてしまふから商人は大狼狽、「もし／＼、あがりましたお錢が足りません。」と血聲をあげても聾だからおかまひなし、何をいつてもわからぬので、皆が唾に恐れるとき。

## 三 足駄禁制

あふりか、あめりかの奥の方といふと、古來靴のあとのついたる験はないといびますがこゝに妙なことありさね、日本のしかも東京の中に足駄のあとのない處があるが知つておいでか。え、え、何ですと、十二階の天頂だと。可い加減なことをおつしやい。お次は、何、隅田川の真中だつて、飛だことを、屋根や川の中にいづ足駄の跡のあつたゝめしがあります。わたしの申すのはそんなんぢやあない、土の上に足駄のあとの無い處を御存じかと申すんです。わかりますまい、あげませうとおつしやい、強情な。それ

植物園さ。二錢で切符を買つて入らうとすると、門衛さん、「足駄を脱げ。」といふ。はだして入ることか、とぎよつとすると、そこは御深切に草履を貸すなり。おつと來たりと飛込む後から呼留めて、「三三厘だ、三厘だ。」「寄席でなしに下足料の用處はこゝばかりだ。」と呟いて入る、初雪の時も二の字は見えず。

【完】